

29 岡崎国第2-3号
平成29年12月1日

関係大学大学院研究科長 殿

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長
山本 正 幸
(公印省略)

平成30年度自然科学研究機構基礎生物学研究所
特別共同利用研究員の受入れについて(通知)

基礎生物学研究所は、大学共同利用機関として、広く基礎生物学及びこれらに関連する分野における研究者との共同利用に供されるとともに、研究者の養成に関しては、国、公、私立大学の要請に応じて、大学院の学生を「特別共同利用研究員」として受け入れ、併せて研究指導を行い大学院教育の協力を行っています。

については、別紙受入要項のとおり平成30年度の特別共同利用研究員を募集しますので、貴研究科の関係者に周知くださるようお願いいたします。

なお、基礎生物学研究所ホームページ(<http://www.nibb.ac.jp/collabo/education.html>)でも特別共同利用研究員の募集についてのご案内をしていますのでご覧ください。応募書類の様式1、様式2をダウンロードしてご利用いただけます。

平成30年度

基礎生物学研究所特別共同利用研究員受入要項

1. 受入人員

細胞生物学	若干名
発生生物学	若干名
環境生物学	若干名
神経生物学	若干名
進化多様性ゲノム生物学	若干名
生殖発生学	若干名

2. 受入対象

大学院に在学中の者(基礎生物学及び関連分野の専攻者)とします。
ただし、修士課程(博士課程(前期))の学生については、当該大学院における授業・単位取得等に支障のない者に限ります。

3. 提出書類

- (1) 所属する大学院の研究科長の受入申請書(様式1)
- (2) 指導教員の推薦書(様式2)
- (3) 当該学生の在学証明書
- (4) 当該学生の略歴、研究歴(A4判用紙を用い横書とする。)

なお、平成30年度に大学院に入学又は進学予定者については、あらかじめ提出書類について、所内の受入れ指導担当研究教育職員(教授又は准教授)と相談してください。

4. 受入期間

原則として平成30年4月から1年間とします。ただし、特に必要と認められる場合は、年度中途において受入れを許可することがあり、この場合の受入期間は、6ヶ月以上を原則として、受入れを許可した年度の末日までとします。

なお、場合により延長(修士課程(博士課程(前期))の学生は、1年を超えないものとします。)又は短縮を認めることがあります。

5. 研究場所

基礎生物学研究所(岡崎市明大寺町字西郷中38又は岡崎市明大寺町字東山5-1)

6. 提出書類の締切

平成30年2月14日(水)

なお、前記4のただし書の場合にあっては、受入れを希望する1か月前とします。
(注) 書類提出前に、あらかじめ所内の受入れの指導担当研究教育職員と受入について、十分打ち合わせてください。

7. 授業料

無料

8. 審査

提出された書類に基づき所内の委員会において審査し、その結果を研究科長に通知します。

9. 研究指導項目及び指導担当研究教育職員

研究指導項目	研究部門等名	教授	電話番号	准教授	電話番号
細胞生物学	細胞動態	上田貴志	55-7530		
	定量生物学	青木一洋	59-5235		
	クロマチン制御	中山潤一	55-7680		
	神経細胞生物学			椎名伸之	55-7620
	細胞応答	山本正幸	55-7650	山下 朗(*)	55-7511
	幹細胞生物学			坪内知美	55-7693
	時空間制御			野中茂紀	55-7590
	多様性生物学研究室			真野昌二	55-7500
	核内ゲノム動態			宮成悠介(*)	59-5850
発生生物学	形態形成	上野直人	55-7570	木下典行	55-7573
	分子発生学	高田慎治	59-5241		
	初期発生	藤森俊彦	59-5860		
	構造多様性			児玉隆治	55-7578
	植物発生生理			川出健介(*)	59-5883
環境生物学	環境光生物学	皆川 純	55-7515	高橋俊一	55-7517
	光学解析室			亀井保博(*)	55-7535
神経生物学	統合神経生物学	野田昌晴	59-5846	新谷隆史	59-5847
	神経行動学	東島眞一	59-5875		
	神経生理学			渡辺英治	59-5595
進化多様性ゲノム生物学	生物進化	長谷部光泰	55-7546	村田 隆	55-7549
	共生システム	川口正代司	55-7564	征矢野敬	55-7563
	進化発生	新美輝幸	55-7606		
	バイオリソース	成瀬 清(*)	55-7554		
	生物機能情報分析室			重信秀治(*)	55-7670
生殖発生学	生殖細胞	吉田松生	59-5865		

*は特任教員

電話はダイヤルイン方式になっておりますので、市外局番 0564-部門電話番号をダイヤルしてください。

所内対応指導担当研究教育職員の最新情報は、基生研ホームページ対応研究部門一覧(<http://www.nibb.ac.jp/>)をご覧ください。

なお、詳細については、各指導担当研究教育職員に問い合わせてください。

10. その他

万一の災害等について、公益財団法人日本国際教育支援協会の行っている学生教育研究災害傷害保険（付帯賠償責任保険を含む。）は、本研究所において発生した災害等の場合も適用されますので、あらかじめ所属大学で加入の上申請してください（本研究所では、特に災害補償制度は準備しておりません。）。

11. 書類提出先

〒444-8585 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38
自然科学研究機構 岡崎統合事務センター
総務部 国際研究協力課 大学院係
TEL(0564)55-7139(ダイヤルイン)

（封筒の表に「特別共同利用研究員書類在中」と朱書のこと）

基礎生物学研究所の研究部門・研究室の研究の現状

○ 細胞動態研究部門

ゴルジ体や液胞などの単膜系オルガネラ間を結ぶ物質輸送機構、“膜交通”は、原始真核生物からヒトや植物を含む現存の生物に至るまで保存された普遍的な細胞機能である。一方で、真核生物の各系統は多様性に満ちた体制や生命現象を獲得しており、その発現においても、各オルガネラの機能や膜交通が重要な役割を担っている。我々が研究対象とする植物においても、形態形成や自然免疫、環境応答などの植物独自の現象に膜交通が深く関与することが、我々をはじめとする各国の研究グループにより明らかにされている。我々の研究室では、シロイヌナズナとゼニゴケのオルガネラ機能や膜交通の分子機構を比較解析することにより、陸上植物において膜交通経路やオルガネラ機能の新生や多様化がいかんにして起こってきたのかを明らかにするとともに、それがどのような形質の進化と関わっているのかを明らかにするべく研究を行っている。

○ 定量生物学研究部門

細胞とは、外界からの入力情報を処理し、表現型を出力するシステムと捉えることができる。そのシステムの実態は細胞内のシグナル伝達系であり、極論すると物理化学的な反応の連鎖である。従って、理論的には全て微分方程式で記述し、コンピューターで数値計算することで全ての要素の振る舞いとその結果としての表現型を予測することが可能である。しかし、反応を計算するための定量的な情報が現状では圧倒的に不足している。本研究部門では、細胞がもつ特徴的な表現型である「増殖」、「分化」、「細胞死」に関わるシグナル伝達系を定量的に理解することを目指している。生化学、分子生物学、細胞生物学、イメージングなどの手法を用いた反応パラメーターの測定、コンピューターを用いた数値計算、さらに光や化学物質によるシグナル伝達系の摂動などを組み合わせて研究を進める。

○ クロマチン制御研究部門

真核細胞の染色体には、高度に凝集したヘテロクロマチンと呼ばれる構造が存在している。この高次のクロマチン構造は、転位因子（トランスポゾン）や反復配列など、本来ホストのゲノムにとって不必要な配列の増幅を抑制するために重要な構造であるばかりでなく、セントロメアやテロメアなど、染色体の正確な分配や構造の維持に必要な機能ドメインの形成に寄与するとともに、エピジェネティックな遺伝子発現の制御にも重要な役割を果たしている。したがって、この高次のクロマチン構造を形成する分子メカニズムが明らかになれば、複雑なエピジェネティック現象の理解につながると考えられる。さらに様々なモデル生物による研究から、このヘテロクロマチンの形成過程に、二本鎖のRNAによって引き起こされるRNAサイレンシングと呼ばれる現象の関与が明らかにされているが、そ

の分子機構の詳細にはまだ数多くの謎が残されている。本研究部門では、主に分裂酵母と哺乳類動物細胞を用いて、生化学的、遺伝学的、分子生物学的手法を統合して、高次クロマチン構造の形成メカニズムの解明に取り組んでいる。

○ 神経細胞生物学研究室

DNA→mRNA→タンパク質という遺伝子発現は生命活動の根幹であるが、神経細胞ではこの遺伝子発現のうち、タンパク質への翻訳が局所的に制御されている。すなわち、一部の重要なmRNAが神経樹状突起へ輸送され、入力があったシナプス近傍で局所的にタンパク質へ翻訳される。このmRNA輸送・局所的翻訳制御によって、入力強度・頻度の高いシナプスが選択的に強化され、それが記憶や学習に重要であることが明らかにされてきている。樹状突起へのmRNA輸送と局所的翻訳制御に中心的な役割を果たしているのがRNA granuleと呼ばれる巨大複合体である。本研究室ではRNA granuleに局在するRNA結合タンパク質およびmRNAを同定、解析するとともに、それらがシナプス機能、神経ネットワーク形成、さらには記憶や学習などにどのような役割を果たすかについて、マウスを用いて分子レベルから個体レベルまで研究をおこなっている。

○ 細胞応答研究室

細胞は、自分の周囲にある栄養素やホルモンの量、温度、圧力などを感知して、どのような活動を行うかを決定する。特に、卵子や精子を生み出す生殖細胞は、周囲の条件に応答して、染色体の数を半減させる特殊な細胞分裂である減数分裂を開始する。減数分裂では、一度のDNA合成の後、二度の連続した染色体分配が行われる。この間に、高頻度の遺伝子組換えや、相同染色体が両極に分かれる特殊な染色体分配など、体細胞では見られない興味深い特徴がある。本研究室は、減数分裂を行う最も単純な生物の一つである分裂酵母をモデル系として、細胞が環境の変化を感知して、減数分裂を行って配偶子を形成するまでの過程を分子レベルで記載することを目標とし、研究を行っている。

○ 幹細胞生物学研究室

胚性幹細胞は個体内の全ての細胞種を生み出す能力(多能性)を持つ特殊な細胞集団で、これらを医療に役立てる試みが積極的になされている。しかし、多能性細胞は細胞周期制御など基本的な点で他の細胞種と異なっており、分かっていないことも多い。中でも、胚性幹細胞が遺伝情報を維持するメカニズム、また、分化・脱分化の過程でさらされるゲノム不安定化要因に関する研究は、他の細胞種と比べて遅れをとっている。本研究室では、マウスの胚性幹細胞及び細胞融合によるリプログラミングの系などを使って、特にDNA複製中のストレスに起因したゲノムの不安定化及びそれらに対する細胞応答を明らかにすることを目標とし、細胞生物学的手法を主軸に解析を行っている。

○ 生殖細胞研究部門

有性生殖を営む多細胞動物において、配偶子-卵子と精子-を作る生殖細胞は、次の世代に遺伝情報を正確に伝達する。一方、多数の配偶子を継続して生産することにより子孫を確実に残すことが担保される。本研究部門では、マウス精子形成を主な対象として、正確性と生産性を併せ持つ配偶子形成の謎に挑戦している。継続する精子形成を支える「幹細胞」の細胞としての実体、その精巣内での振る舞い、細胞集団としてのダイナミクス、それを制御する「ニッチ」の実態と機能、これらの機能を支える分子メカニズム—これらを中心課題に据えて、形態学、分子遺伝学、ライブイメージング、数理統計解析など多角的方法論で研究を進めている。

○ 形態形成研究部門

受精した卵が細胞分裂を繰り返しながら生物固有の形づくりを進行する過程、すなわち形態形成には個々の細胞の形態変化や移動による3次元的な組織リモデリングが必須である。細胞分化によって新たな形質を、また細胞骨格の再構成によって新たな形態や細胞極性を獲得した細胞は、それぞれの運命にしたがって正しく配置されることによって、形態的、機能的に洗練された器官、そして個体を形づくる。本研究部門では形態形成を司る細胞外シグナルや物理的な力に焦点をあて、細胞・組織ダイナミクスを解明することを目指して、ホヤ、アフリカツメガエル、マウスなどモデル動物を用いた研究を行っている。

○ 分子発生学研究部門

動物の形態形成のさまざまな局面で分泌性タンパク質は重要な働きを担っている。本研究部門では脊椎動物の体幹部の初期発生をモデルに、形態形成過程における分泌性タンパク質の作用機構を解明することを目指している。具体的には、分泌性タンパク質およびその標的遺伝子の機能を、遺伝子改変マウスやアフリカツメガエルを用いて解析すること、ならびに体幹部形成変異体の探索とその解析を、ゼブラフィッシュを用いて行っている。

○ 初期発生研究部門

動物の発生は受精卵に始まり、やがて明確な体軸を持つ構造が形成される。ほ乳類受精卵には将来の体軸に関わる情報は偏って存在していないが、マウスでは受精後約6日目には将来の体軸を見いだすことができる。ほ乳類胚において、体軸を決める情報がどのように胚の中に形成され、形として具現化されるかを解明することを目指している。主にマウスを用い、ライブイメージング、細胞系譜解析などの手法により、胚の中での細胞の挙動を明らかにする。ライブイメージング観察用の一連のレポータートランスジェニックマウスの作製および維持、胚の培養、顕微鏡装置の開発も行っている。個々の細胞の個性がどのように獲得され、胚全体の形が形成されるかについても研究を進めている。

○ 統合神経生物学研究部門

本研究部門では、脊椎動物の中樞神経系が個体発生の過程で形成される仕組みや、成体において完成した脳・神経系が機能する仕組みについて、主にマウスを用いて分子・細胞

レベルからシステムのレベルまで総合的に研究している。また、病態との関連から創薬まで視野に入れた研究を行っている。主要な研究プロジェクトは以下の通りである。

- (1) 体液・血圧の恒常性を司る脳内機構
- (2) 受容体型プロテインチロシンホスファターゼの機能と役割に関する総合的研究
- (3) 神経細胞の移動と軸索誘導における細胞骨格制御の分子機構

○ 神経行動学研究部門

運動・行動を作り出す際の中枢神経系神経回路の作動様式を、単一神経細胞レベルの解像度で明らかにすることは、神経科学の大きな目標の1つである。本研究部門は、シンプルな中枢神経系を持つ小型魚類を用い、動物の行動が作り出される際の神経系の動作様式の解明を目指している。さまざまなタイプの神経細胞を特異的にラベルするトランスジェニックフィッシュを多数作製し、(i) 特定のタイプの神経細胞の活動パターンを電気生理学やイメージングによって計測すること、(ii) 光遺伝学手法などを用いて、特定のタイプの神経細胞の活動を人為的に制御すること、が研究手法の中心である。現在、ゼブラフィッシュ幼魚を用い、(1) 遊泳リズムの作られる仕組み、(2) 運動のスピードを切り替える仕組み、(3) 胸びれと体幹の動きを協調させる仕組みの解明を中心に研究を進めている。

○ 神経生理学研究室

(モデル生物研究センター モデル動物研究支援室 哺乳動物飼育開発支援ユニット・モデル動物解析支援ユニット、小型魚類飼育開発支援ユニット、器官培養研究支援室)

動物の行動生物学が中心課題。現在はメダカとヒトの視覚系の解析を中心に、行動生物学的な研究を行っている。視覚の動物と言われるメダカとヒトに心理物理学的なアプローチを行うことによって、動物の見るメカニズム、そして行動の原理を明らかにしていく。多くの動物は見るという能力を発達させることによって、生存競争に勝ち残ってきた。見るメカニズムを明らかにすることで、脳の、そして動物の理解が深まると考える。

○ 生物進化研究部門

生物は祖先が持っていなかった新しい形質を次々と生み出しながら進化してきた。そして、新規形質の多くは、いくつかの性質が整って初めて有利になるような複合形質である。新規複合形質はランダムな突然変異の蓄積だけで説明できるのだろうか。あるいは未知の進化機構が存在しているのだろうか。この問題を解くには、新規複合形質を遺伝子のレベルに還元し、それらができあがるメカニズムを解明し、さらに、近縁種との比較から進化過程を推定することが必要である。我々は、ゲノム解読技術の革新を助けに、これまで分子生物学分子遺伝学的還元のできなかつた非モデル生物を材料として、(1) 植物特有の細胞構築・動態、(2) 多能性幹細胞形成維持、(3) 陸上植物の発生、(4) 擬態、(5) 食草転換、(6) 植物の運動、(7) 植物の食虫性を個別な研究対象として、それらから得られた結果を総合し、新規複合形質がどのように進化しうるかの全体像を描き出すことを目指している。

○ 共生システム研究部門

マメ科植物は根粒菌（原核生物）の感染をうけると根に細胞分裂を誘導し、根粒という共生窒素固定器官を形成する。一方、多くの陸上植物はアーバスキュラー菌根菌（真核生物）と共生し、リンをはじめとするミネラルを効率よく吸収する。近年これら2つの共生には、複数の共通する宿主遺伝子が関わっていることが明らかになってきた。また根粒形成の制御においては CLV1 などメリステム形成の遺伝子が複数流用されてきたこともわかってきた。当研究室では、マメ科のモデル植物ミヤコグサを用いて、植物・微生物共生の分子メカニズムと発進進化プロセスを解明することを目的としている。また、共生や発進現象のシミュレーションによる数理解析を行い、現象の統合的理解を目指している。

○ 進化発進研究部門

圧倒的な種数の豊富さを誇る昆虫は、多様性の宝庫であり、多様性創出の進化メカニズムを解き明かすための研究材料として未知で無限の可能性を秘めている。本研究部門では、昆虫が進化の過程で獲得した新奇形質に着目し、昆虫の多様な形質をもたらす分子基盤および進化メカニズムを解明することを目指している。現在、「昆虫翅の起源と多様化」、「テントウムシの斑紋と擬態」、「カブトムシの角の獲得と多様化」などの研究テーマについて取り組んでいる。非モデル昆虫が持つ興味深い現象の解明には、斬新なアプローチと新規実験技術の導入が必須であり、遺伝子機能解析法などの開発も行っている。

○ バイオリソース研究室

（モデル生物研究センター モデル動物研究支援室 メダカバイオリソースユニット）

条鰭類は脊椎動物の約半数を占める大きなグループである。また条鰭類は哺乳類を含む肉鰭類と姉妹関係を形成することから、我々「ヒト」を含む哺乳類の進化を考察する上でも重要な位置を占めている。我々の研究室では、メダカとその近縁種を用いた性決定システムの進化に関する研究、体色突然変異体の原因遺伝子の同定とその機能解析、脳内の神経活動を可視化するための cre driver 系統の作成などを行っている。Fosmid ライブラリーの作成、遺伝子導入系統の作成、変異体のマッピング、TILLING 法による突然変異体の同定などの共同研究に対応することができる。さらに近年開発された CRISPR-Cas9 によるゲノム編集に必要な gRNA 用プラスミドの調整や卵への DNA/RNA マイクロインジェクションを行うことができる。また2017年から始まった第4期メダカバイオリソースプロジェクトを担う中心研究室として、メダカバイオリソースの収集・保存・配布をおこなうことでメダカ及びメダカ近縁種をもちいた新たな生物学研究の推進を担っている。

○ 構造多様性研究室

鱗翅目昆虫の成虫翅は二次元の上皮組織であり、翅輪郭形状の決定・気管、気管小枝お

よび翅脈のパターン形成・これらと関連した斑紋パターン形成などの興味深い過程を示す。これらの過程を形態学的な手法を用いて細胞レベルで詳細に記述するとともに、内在するメカニズムを明らかにしようとしている。

○ 多様性生物学研究室

多様な生物を用いて、各グループが独自の研究を行っている。

大野グループ：

ナマコ、ヒトデ、ウニ、ウミシダ等における神経ペプチドの生理作用を、生殖腺および生殖細胞の成熟制御を中心に研究している。

鎌田グループ：

出芽酵母を用いて、栄養環境センサー分子 TOR の研究を、遺伝学・生化学・細胞生物学などさまざまな手法を駆使して行っている。

定塚グループ：

酵母をモデルとして、細胞分裂期に形成されるコンパクトに凝縮した染色体の構築機構と、その構造が生物機能に果たす役割について研究している。

星野グループ：（モデル生物研究センター モデル植物研究支援室・アサガオバイオリソースユニット）

アサガオの多様な変異体を使い、遺伝子の発現制御機構と花色の発現機構を研究している。アサガオのゲノム情報など、研究基盤の整備も行っている。

梅根グループ：（モデル生物研究センター モデル植物研究支援室）

イネの内在性トランスポゾンによるゲノムへの影響やその動態と制御機構について研究している。さらに遺伝子の順・逆遺伝学的解析も行っている。

真野グループ：

オルガネラは、独自の機能を発揮しつつも、オルガネラ同士の相互作用によって複雑な代謝系を構築するほか、その機能も一定ではなく、環境変化に応答して機能を変える。また、オルガネラは分裂して増殖したり、逆に分解されて消失する。こうしたオルガネラの機能発現や動態が細胞機能を支えている。本研究室では、植物オルガネラの形成機構や機能発現の制御機構の解明を目的として、特にペルオキシソームとオイルボディを中心に、細胞生物学、分子生物学、生化学、イメージング技術を駆使して解析している。

木森・加藤グループ：（新分野創成センターイメージングサイエンス研究分野）

光学顕微鏡や電子顕微鏡等で撮影された生物画像を対象として、新規の画像処理・解析手法の開発やアプリケーションソフトウェアの開発等を行っている。

○ 環境光生物学研究部門

植物は、環境の変化に自らを順化適応させることで生き残りをはかる。太陽光を集め利用可能なエネルギーへの変換を行う光合成においても、さまざまな階層における光環境適応がみられる。本研究部門では、単細胞緑藻を中心としたモデル微細藻類について、分子遺伝学、生化学、分光学的手法さらにはライブイメージングの手法を駆使することで、特に光を集めるアンテナ装置がいかに効率よく光を集めているのか、その分子基盤の解析を行っている。また、得られた基礎的知見を、南極の緑藻やサンゴと共生する褐虫藻、北太平洋の珪藻などに応用し、環境において重要なこれらの光合成生物の生理生態の理解を目指している。

○ 季節生物学研究部門

季節の移ろいとともない、日の長さ（日長）や気温、降水量など、生物をとりまく環境は刻々と変化する。動物はこの環境の変化を感知して、繁殖、渡り、休眠、換毛など、様々な生理機能や行動を変化させているが、動物が季節の変化を読み取る仕組みはまだ解明されていない。メダカは、日長や水温の変化を敏感に感知し、春から夏にかけて繁殖する。また、ゲノムが解読されているだけでなく、生息する地域によって季節の変化に対する応答性が異なることが知られている。本部門では、日本の様々な地域で採集された野生メダカや遺伝子改変メダカを駆使して、動物が日長や温度の変化を感知して環境の季節変化に適応する仕組みの全容の解明を目指している。

○ 時空間制御研究室

本研究室では発生における左右非対称性決定の機構をマウス胚のライブイメージングによって解析している。またライブイメージングに適した顕微鏡自体の開発も手がけている。現在、褪色や光毒性が少なく高速な立体画像取得を特徴とする光シート顕微鏡を操作性に優れた市販品と高速性能に優れた自作品の2台運用しており、統合イメージング共同利用研究などの枠組みで発生生物学、細胞生物学、神経科学等での共同利用を実施している。

○ モデル生物研究センター

モデル生物研究センターは、生物学研究の基盤となるモデル動植物等について、飼育栽培のための設備を提供するとともに、形質転換体の開発や保存、さらには解析研究の支援を行う施設である。本センターは、モデル動物研究支援室（哺乳動物飼育開発支援ユニット、モデル動物解析支援ユニット、小型魚類飼育開発支援ユニット、メダカバイオリソースユニット）、器官培養研究支援室、モデル植物研究支援室（アサガオバイオリソースユニット）から成り立っている。マウス施設では、ノックアウトマウス・トランスジェニッ

クマウス作製などにより遺伝子操作マウスの開発・飼育維持・解析を行い、受精卵凍結法により系統保存を行っている。平成 19 年度からメダカバイオリソースの中核拠点となり、従来の変異体や遺伝子導入小型魚類飼育管理に加え、全国の汎用系統なども管理維持し、配布と有用系統の開発も行っている。鳥類施設では遺伝子導入により、遺伝子機能解析研究が可能となっている。器官培養施設では、細胞と器官レベルの実験を支援している。植物施設ではモデル植物の育成と形質転換体の開発支援を行っており、解析用の各種人工気象室を備えている。アサガオ施設は、ナショナルバイオリソースプロジェクトの分担機関として、アサガオの各種リソースの収集・保存・提供を行っている。

1. モデル動物研究支援室

1) 哺乳動物飼育開発支援ユニット

SPF マウスの飼育及び開発の支援を行っている。モデル生物研究センターの施設内には最大 2 万匹の SPF マウス飼育できる設備を備えており、マウス飼育支援のための凍結受精卵の作成、保管、解凍、移植の支援も行っている。さらにはトランスジェニックマウスやノックアウトマウス作成を支援するための偽妊娠マウスや里親の供給も行っている。所内の部門や研究室を通じた共同研究を支援している。

2) モデル動物解析支援ユニット

SPF マウス及び SPF ラットを利用した解析研究を支援している。モデル生物研究センターの施設内には、主として行動解析を行うための実験室を三つ備えている。一つは山手地区 SPF 施設内にある行動解析専用施設で、残り二つは明大寺地区にあり P2 及び P3 レベルの組換え DNA 実験室も可能な行動解析実験室となっている。所内の部門や研究室を通じた共同研究を支援している。

3) 小型魚類飼育開発支援ユニット

近年新たに実験動物として確立されてきたメダカ、ゼブラフィッシュを用いた実験、さらにニワトリを主として用いた鳥類の実験を支援する。自動循環水槽や大型の孵卵室を備え、卵へのマイクロインジェクションもユニット内で可能となっている。新たな遺伝子改変系統の作出を行っており、それら遺伝子導入小型魚類が飼育維持できる環境 (P1A) を整えている。ニワトリの遺伝子組み換え実験 (P2A) にも対応可能となっている。

4) メダカバイオリソースユニット

メダカバイオリソースユニット (<http://www.shigen.nig.ac.jp/medaka/>) ではメダカに関する生物遺伝資源の収集・保存をおこない、それらを統合的に提供することでメダカを用いた生物学・基礎医学分野を飛躍的に発展させることを目的として活動している。現在は 600 以上のメダカ系統、40 万あまりの cDNA クローン、28 万あまりの BAC/Fosmid クローン、孵化酵素の提供とともに、2010 年からは TILLING による変異体スクリーニングシステムの提供も行っている。2014 年度からは CRISPR-CAS9 によるゲノム編集のサポートも行っている。

2. 器官培養研究支援室

培養細胞及び培養器官を利用した研究を支援する。モデル生物研究センターの施設内には、一般細胞培養室を初め、ES 細胞専用培養室、P2 実験専用培養室、器官培養室、酵母培養室などを備えている。また山手地区と明大寺地区それぞれに凍結細胞を保存するための大型液体窒素タンクを備えている。所内外の共同研究の支援を行っている。

3. モデル植物研究支援室

シロイヌナズナ、ミヤコグサ、アサガオ、ヒメツリガネゴケ、クラミドモナスなどのモデル植物を、光・温度・湿度等を厳密に制御した環境条件のもとに培養育成するためのインキュベーターや恒温室が整えられている。また、強光及び極低・高温の極限環境下で培養育成する施設も設置されている。これらのほとんどは P1P レベルに指定されており遺伝子組換え実験も可能である。屋外には大小 2 つの温室、3 棟（4 室）のファイトトロン、2 棟（5 室）の P1P レベル形質転換植物用温室、圃場及び管理室が設置されている。

1). アサガオバイオリソースユニット

アサガオバイオリソースユニットでは、ナショナルバイオリソースプロジェクト・アサガオ（代表機関：九州大学）の分担機関として、アサガオの各種リソースの収集・保存・提供を行っている。おもに取り扱うリソースは、変異系統ならびに cDNA と BAC クローンである。国内外におけるアサガオと近縁種の研究を支援している。

○ 生物機能解析センター

共同利用研究体制の強化を目的とした研究施設の改組により、平成 22 年度に生物機能解析センターが設立された。生物機能解析センターは、生物機能情報分析室、光学解析室、情報管理解析室より成り、それぞれの室に所蔵される分析・光学機器を用いた実験・研究をサポートできる体制を整えている。このような機器を利用した研究とともに、それぞれの室に所属する教員は独自の研究を展開している。

生物機能情報分析室は、遺伝子・タンパク質解析の共同研究拠点として、基礎生物学研究所の分析機器の管理・運用を行っている。超遠心機のような汎用機器から次世代シーケンサーのような先端機器に至るまで、40 種類 70 台にのぼる機器を所蔵し、その多くは所外の研究者にも開放している。（生物機能情報分析室ホームページ <http://www.nibb.ac.jp/~analyins/CAI-home.html> 参照）特に、機能ゲノミクスに力を入れており、次世代 DNA シーケンサーと質量分析機を利用した共同利用研究を行っている。

光学解析室は大型分光照射施設である大型スペクトログラフと、光シート顕微鏡、2 光子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、さらに赤外レーザーで局所的遺伝子発現を実現する IR-LEGO 顕微鏡を所蔵している（各装置の詳細は光学解析室ホームページ <http://www.nibb.ac.jp/l spectro/> 参照）。これらの機器を用いた共同利用研究を行っている。また、植物の電子顕微鏡撮像の支援も行っている。

情報管理解析室は、共有メモリサーバ、分散処理用計算機クラスタ、大容量ディスクアレイ装置などから構成される生物情報解析システムを運用しており、これらを用いたゲノム規模での配列データ解析や画像処理、各種データベースの構築と運用のサポートなどを行っている（詳細は <http://www.nibb.ac.jp/cp room/> 参照）。これらの設備を活用した、

大規模データ解析やデータベース構築などを含む研究課題を共同利用研究として公募している。

1. 生物機能情報分析室

最先端のゲノム科学を駆使して、「共生・発生・進化」をキーワードに研究を行っている。特に、昆虫アブラムシとその共生細菌ブフネラの共生系をモデルに、共生によるイノベーションを支える分子・遺伝子基盤とその進化過程の解明を目指している。実験生物学と情報生物学の融合的アプローチが特徴である。

2. 光学解析室

「光」を使った非侵襲的な遺伝子発現誘導顕微鏡と、遺伝子の変異体ライブラリーから作製した変異体を組み合わせて、「個体レベル」での遺伝子機能解析を行っている。研究対象としては光学的アプローチに適し、ゲノムなどの情報が完備されたモデル生物である「メダカ」を使っている。遺伝子発現誘導顕微鏡とは、生体内の単一細胞に赤外線を照射することで熱ショック応答により目的の遺伝子発現を誘導するIR-LEGO法(Kamei et al. Nat. Methods, 2009)である。一方で、上記顕微鏡技術を駆使し、メダカ変異体や、トランスジェニック技術を使って生体内における様々な遺伝子の機能解析を目指している。

3. 情報管理解析室（ゲノム情報研究室）

情報科学的アプローチで大量のゲノム情報から生命現象の理解を目指す研究を行っている。特に、近年急速にデータが蓄積し、自然界における多様性の実態が明らかになりつつある微生物のゲノムを対象として、網羅的な比較解析によるゲノム情報の体系化と、それに基づくゲノムの機能や進化の解明を目指した研究を行っている。このため、多数のゲノムを同時に比較するための高速オーソログ分類手法の開発や、それに基づく網羅的な比較ゲノムデータベースの構築を行ってきた。こうした情報基盤に基づいて、水平移動を含む複雑な微生物ゲノムの進化プロセスの解明に向けた取り組みを進めている。

○ IBBPセンター

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、広い地域において研究・開発活動にも大きな影響を与えた。地震による直接被害とともに、長期にわたるライフラインの停止によって実験動物の飼育も困難となり、ディープフリーザー等に保管していた生物遺伝資源は長期停電によって大きなダメージを受けた。日本は東日本大震災後も震度6強を越える地震が熊本県熊本地方及び阿蘇地方や鳥取県中部地方など年1回以上の頻度で発生する地震多発国であり、研究・開発活動を震災から守るための対策は不可欠である。

災害や不慮の事故による生物遺伝資源の毀損や消失を回避するためには、個々の研究によって創出された生物遺伝資源のバックアップを作成し、オリジナルとは地域的に離れた場所に保管することが有効である。このため個々の研究者が作成した生物遺伝資源のバックアップ保管を目的とした大学連携バイオバックアッププロジェクト（IBBP）を平成24年度から新たに開始した（<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/>）。

IBBPでは自然科学研究機構基礎生物学研究所に気相及び液相式液体窒素タンク、液体窒素自動供給システム、ドライキャビネットを備えた種子保存室、超低温フリーザー、検体

管理データベースシステム、機器監視システム、液体窒素製造装置など生物遺伝資源のバックアップ保管に必要な最新の設備を備えた IBBP センターを設置した。

IBBP センターは、生物遺伝資源の保管・管理を担当する。また北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学には大学サテライト拠点を設置し全国の大学・研究所からのバックアップ依頼を受け付け、IBBP センターと協力してプロジェクトを推進する。IBBP センターでは上記の保管施設に加え、プログラムフリーザー、示差走査熱量計、真空冷却加熱ステージ付き蛍光顕微鏡、精子運動自動解析装置等の超低温保存技術の開発を推進するための機器を備えている。

さらに、生物遺伝資源新規保存技術開発共同利用研究の実施や Cryopreservation Conference の開催によって、生物遺伝資源開発者と低温生物学・化学・物理学研究者等の出会いを提供し、より多様な生物遺伝資源の長期保存技術の開発を推進している。また開発された技術を研究コミュニティに広げる技術講習会も開催している。

○ 岡崎統合バイオサイエンスセンター・核内ゲノム動態研究部門

ヒトを含む様々な生物種のゲノム DNA の塩基配列の全容が明らかとなり、細胞特異的なエピゲノム情報も蓄積されつつある。最近では、核内におけるクロマチンのローカルな 3 次元構造が転写を含むゲノムの機能に重要な役割を担うことが明らかとなってきた。この膨大なゲノム情報はクロマチン繊維として数 μm の核に絡み合うことなく収納されており、その立体配置をもったゲノム核内構造は高度に組織化されている。当研究室では、クロマチンの動きをイメージングする新しい技術を用いることで、これまでとは全く異なるユニークなアプローチで、核内ゲノムのトポロジー変化が細胞の運命決定へ与える影響を理解し、ゲノム高次構造の制御メカニズムの解明に迫る。

○ 岡崎統合バイオサイエンスセンター・植物発生生理研究部門

発生現象を適切に進めるためには、細胞（群）の運命・役割を決める化合物を生成したり、進行そのものの維持に関わる代謝システムを働かせたりする必要がある。ところが、発生過程に連動した代謝システムの制御は、思いのほか理解されていない。そこで本研究室では、代謝システムの視点から、発生現象のより良い理解を目指している。具体的には、特定の発生現象と関連している未知なる代謝システムを同定するために、モデル植物であるシロイヌナズナを用いた遺伝学的スクリーニングを行い、そのうえで詳細な個別の解析を進めている。また、従来の生化学や分子生物学的な手法に加えて、代謝物を網羅的に解析するメタボロミクスを活用し、代謝システムを発生現象と連動させる仕組みや、その生体内における機能的な役割についても解明を目指している。

(様式1)

平成 第 年 月 日
号

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長 殿

大学大学院
氏名
研究科長
職印

特別共同利用研究員の受入れについて(申請)

標記のことについて、下記の者を申請しますので、よろしくお取り計らい願います。

記

ふりがな 学 生 氏 名		男 女	昭和・平成 年 月 日生 (年令 才)
現 住 所	〒 - TEL() -		
課 程・専 攻	課 程 学専攻	平成 年度 入学 進学	
		平成30年度 第 年次	・ 区 分 制 ・ 5年一貫制
受入希望の研究部門 等名及び指導担当研 究教育職員氏名			
研 究 題 目			
受 入 希 望 期 間	平成 年 月 ~ 平成 年 月		

(様式 2)

推 薦 書

平成 年 月 日

自然科学研究機構
基礎生物学研究所長 殿

指導教員(推薦者)
所属・職名・氏名

⑩

貴研究所の特別共同利用研究員として下記の者を推薦します。

記

推薦する学生の氏名・所属	
推薦理由（評価及び貴研究所での研究内容を含む。）	
健康に関する所見	